

## 花 山 だ よ り (十二月)

新星現はる!! Nova 出現!! 今年も正に終らんとする時、突如此の警鐘は亂打され、世界中の耳目はヘルクレスの一隅に集中されて了つた。誠に1934年は日食に始まり、新星に暮れた年である。扨て、此の新星發見電報が東京から轉送されて、花山で受取つたのが17日午後4時。山本臺長は生憎1日より臺灣へ出張されて留守なので、臺中に居られる山本先生に打電すると同時に、變光星課長小山先生が總指揮官となつて、直ちに近くの課員には電話で、遠方へは速報を發して通知する一方、觀測の準備にとりかゝる。他方柴田先生はスペクトルの撮影準備を始め、又た、觀測用星圖や觀測上の注意事項を満載した花山急報は、續々として發行されて全國に配布される等、花山は急に活氣を呈して來た。今は既に各地の觀測課員からの報告が、どんどん机上に積まれつつある盛況である。此の新星の騒ぎの間に18日にはプレヤデスの月に依る掩蔽があり、天文臺はまるで大晦日の様な忙がしさであつた。尙先月から續いた草津の栗太農學校の經緯度觀測は天氣其他の都合で延々になつてゐたが、6、10兩日の觀測を最後として完了した。

話は前後するが、本月1日に山本臺長招待の親睦會が東洋花壇で開かれた。出席者16名の盛會であつて、此の會の依つて以つて開催せざる可からざるに至つた理由を探究した人の言を借りると、その名目は次の様である。親睦會、忘年會、山本先生臺灣旅行惜別會、池田氏高檢バス祝賀會、草場氏歡迎會等々。まあ理由は何んでもよろしい。大いに満腹して、池田さんの植物の話や草場さんの天文に興味を持つた動機の話等伺ひ、一夕を楽しく過した。

8日には協會の例會があつた。出席者は少なかつたので、天文臺の座談會の感じがする。菰部氏夫妻の御土産の菓子を頬張りながら、山本先生の「ヤングの偉業を偲ぶ」、柴田先生の「ヒダルゴ星の再發見」の講演を聴く。

今度當天文臺に66種の大反射鏡を英國から購入する事が決定した。從來の46種鏡よりも遙か大きく正に東洋一で、春頃京都へ到着の豫定である。

倉敷の荒木氏は7—9日に、名古屋の村上忠敬教授は久々にて28日に、共に花山を訪ねられた。(星見山人)